

親と子の自然観察

関口 伸一

公益財団法人トトロのふるさと基金 理事

海城中学高等学校 理科教諭

第五回 春の訪れ —自然を観察すること—

厳しい寒さが続き、早く春が来ないかと待ち遠しくなる。今年もきちんと春が来てくれるのかと少し心配になったりもする。それでも生き物たちは春に向けて早くも動き始めている。

冬でも水がある、雑木林と接した池や田んぼの水底ではヤマアカガエルの成体がじっと春を待っている。カエルの成体は肺呼吸だから苦しくはないのか？とってしまうが、よく見ると皮膚がだぶだぶになっていて、表面積を大きくしている。水温が下がると溶存酸素の量も増し、カエルの呼吸量も落ちるので、皮膚呼吸で十分にまかなうことができるのであろう。

トトロの森がある狭山丘陵では2月に入るとヤマアカガエルが産卵をする。手を入れておくと感覚がなくなるくらいの低温の水中で、外温性であるヤマアカガエルが産卵できることが不思議でならない。ただ、寒い中でカエルの卵塊をみると心配も和らいでくる。この後、ニホンアカガエル、ヒキガエルと続けて産卵を行う。今年も多くの生物が躍動するいつもの春が早く来ることを願う。

植物は秋までに作った冬芽を大事にしている。枝先につく冬芽は一見地味であるが、よく見てみると面白い。雑木林の林縁などにみられるリョウブの冬芽は傘をかぶっているように見える。雪が降り、寒さに耐える姿はとても味がある。雑木林の林床にあるウグイスカグラは刀のつばを連想させる構造の上に冬芽があって印象的である。寒い中でも冬芽が膨

らみ、春への期待感を持つことができる。

今まで4回にわたって四季折々の自然観察を紹介してきた。子供たちにはなるべく多くの自然に接してもらいたい。グローバル化が進む中で、多様な文化、価値観を許容することが大事になる。日常生活で生物に接していると本能的に好きな生き物や嫌いな生き物が出てくる。こうした中、自然観察をしていると嫌いな生物でも、自然界の中でさまざまな生物に影響を与え、与えられつつ共存していることに気づくだろう。社会における他者理解と通ずるものがあるのではないだろうか。インターネットで個人が他者に影響を与え、与えられる時代、複雑な相互関係の中で生きる生物から学ぶことは多くあるだろう。こうした自然の複雑系の中から法則性や新たな発想を見つけ出すこともできるし、自然のしくみの素晴らしさ、その偉大さに気づくこともできる。謙虚に自然から学ぶことが、生態系内で生きる私たちの将来を担う子どもたちにとって大事なことであると感している。

最後に、私をこの世界に引き込んだ今は亡き恩師が遺した言葉で締めさせていただきます。

「小中学生時代に自然に親しみよく生きものを観察することから、地域のダーウィンやファールが生まれる可能性がありますし、どんなロボットでもまだ1匹のカブトムシにかなわないことを知ることができるでしょう。なんと素晴らしいことではありませんか！」

トトロのふるさと基金

トトロのふるさと基金は、市民の寄付金により土地を取得するナショナルトラスト活動を行い、狭山丘陵の自然を保全している。現在は28ヶ所（2015年1月時点）のトラスト地がある。里山管理などの市民ボランティアの受け入れも行っている。

トトロのふるさと基金ホームページ URL : <http://www.totoro.or.jp/>